

# 知<sup>ち</sup>究<sup>きゆう</sup>人<sup>じん</sup>

## ニンジン収穫機

オサタ農機(富良野市)  
長田 秀治さん

# 技術屋魂「5ミ」に挑む

野菜の栽培が盛んな富良野地方に、ユ  
 ニークな畑場の農機メーカーがある。自  
 年。機械いじりが大好きで、車以外にも  
 多くのボイラーやストローなど、持ち込  
 まれば何でも修理を引き受けた。  
 あいつのどこに行けば何とかなる。  
 そんな信頼を得た頃、地元の農協職員が  
 工場のトクトにらカ条の社訓が張って  
 あった。「断らない」「できないと言わ  
 ない」「先延ばししない」。69歳の今  
 も作業服姿で機械の改良、開発を続ける  
 長田秀治社長は「まあ、半分は自分自身  
 への叱咤激励です」と笑う。  
 長田さんが郷里の上管内南富良野町  
 機械化の妨げになっていたのが日本独  
 特の「5ミの壁」。根元から5ミ以内で  
 ニークな畑場の農機は基準に合わず、畑でニ  
 ミンを掘り起こしながら同時に葉を切る  
 精度の高い機械が求められていた。  
 試作を始めた長田さんが農業試験場に  
 相談に行くと、農機の担当部長に「ニン  
 ジンは難しい。機械では無理だ」と笑わ  
 れた。無理だと言っながら、何とかしよ  
 じやないか。技術屋魂に火がついた。  
 「ニンジンの収穫機作れないか」  
 当時の収穫は人海戦術の手作業。本数  
 が多いニンジンは重労働で、大産地の南  
 富良野には秋になると近隣や遠くは油縄  
 から大量の「出面さん」が来た。  
 写真・大島 拓人  
 文・森川 潔

# 日曜 Navi

## CONTENTS

03 ▶▶▶

星占い

週間ナビ  
10月12日～18日の番組表

07

味彩フアイル  
おしゃべりルーム  
プレゼント

カ製の部一化  
の又本首が豊之皆びで展メ



ニンジン収穫機を操作し、自社農場で改良ニートを兼ねた収穫に取り組み長田秀治さん(手前)。運転席横の赤いラインに取りつけた4本のコムバルトを回転させて一度に2列のニンジンをはきみ、引き抜きながら葉を切り取る。上川管内陸奥町北穂谷

### ◆ ニンジン収穫機

# ち きゅう じん 知 究 人

秋晴れの青空が広がった今月1

日、オサダ農機社長長の長田秀治さん  
は、上川管内南富良野町北彦宮の自  
社農場で看板商品「ニンジン収穫機

を動かしていた。

長田さんの機械作りは実際に現場

で試しながら「もっと良くできない  
か」と考える工夫と改良の繰り返し  
だ。「兼ねなく試験運転したい」  
と5年前に48分の農場まで確保。収

穫した野菜はコンビニのおでん用な  
どに出荷している。

「ちょっとやっちゃってダメ。朝か  
ら晩まで一日中、自分で収穫してみ  
る。そうすると、操作性がいとか  
悪いとか、どこが汚れるだとか、い

ろんなことを体で感じられる」と長  
田さん。

生まれは夕張岳に近い南富良野町  
十梨別。森林鉄道の機関士から農家  
に転じた父は機好きで、脱穀機の

発動機が故障すると自分で分解して  
直した。小さい頃から「ジオをいじ  
って遊んでいた長田さんも車が好き

で、職業訓練校を出ると旭川の大手  
自動車販売会社に就職。「乗るのり  
も中の仕組みに興味があった。昼休

みには溶かして部品を集めて分解し  
たり、そんな遊びばかりしてました

当時、自動車整備の技能コンク

ルに出て道北大会で優勝したこと  
は、整備士としての小さな誇りだ。

26歳で独立し、南富良野町變賣で  
自動車の整備工場「南富自動車サ

ビスエリア」を開業。畑遣いのニン  
ジン収穫機の開発に乗り出した時

も、機械いじりは昔にならなかつた。  
夜、仕事の後で工場にこもり、中古

の農機を解体。近隣農家に協力して  
もらって試作機を畑で試し、ダメな

部分を見つけては作り直した。

開発を始めて2年後の1992年  
に1号機が完成。しかし、南富良野

町では調子良く動くのに、隣の富  
良野市へ行くど地盤が固い水田から

の転作地に適が立たない。土を握る  
機は角度や硬度を変え、ニンジンの

葉をばさばさ引き抜くベルトは何十

種類もの素材をリスト。葉を切る刃

は調整板を外す「逆転の発想」で精  
度を高めた。改良を重ねて10年。よ

うやく満足のいく性能になった時、  
ニンジンの収穫機では国内で知られ

る存在になっていた。

「おかげさまで、次から次へと研  
究課題がある。引退したら好きな車

いじりをしたいが、まだ先かな」  
愛車に溶接機や工具を積んで、

工場と農場を行き来する生活が続  
く。

## 試して直してなお改良

製作中のダイコン収穫機が並ぶ工場  
内。基本構造はニンジンと同じだ



量大な年代物のトラクタ  
が並ぶ王の館の館内



野菜や果樹の生産が盛  
んな富良野周辺にもプラ  
ウの製造で知られるスガ  
ノ農機（上富良野町）や  
油圧バケットのアトム農  
機（美瑛町）など、個性  
を持ったメーカーが目立  
つ。

後発のオサダ農機（富  
良野市）は90年代から独  
自のニンジン収穫機「ス  
ーパーキャロットル」を  
開発。現在は従業員25人  
を抱え、ニンジンやダイ  
コンの収穫機を中心に年  
間100台ほどを製造・販  
売している。ニンジン収  
穫機は1台600万～1600  
万円。現在は機種が8タ  
イプに増え、昨年「が  
んばる中小企業300社」  
にも選ばれた。

農業王国・  
北海道には地  
場の農機メー  
カーも多い。社団法人「道  
農業機械工業会」(札幌)  
の会員企業は現在31社。  
都道府県別で農機メーカ  
ーの業界団体があるのは  
北海道だけだ。

道内では戦後、馬など  
の畜力に代わってトラクタ  
ーなどの農業用機械が  
本格導入され、小規模経営  
の鉄工所や鍛冶屋さん  
が地域のニーズに即した  
農機を作るようになって  
きた。全国的なメーカーが  
普及品を開発するようにな  
って、北海道と本州  
では農業の規模や手法が  
異なるため、多くの地場  
メーカーが生き残った。

### 知る

入館無料。土・日・祝日と年末年始  
は休館（10月11、12日は開館）。

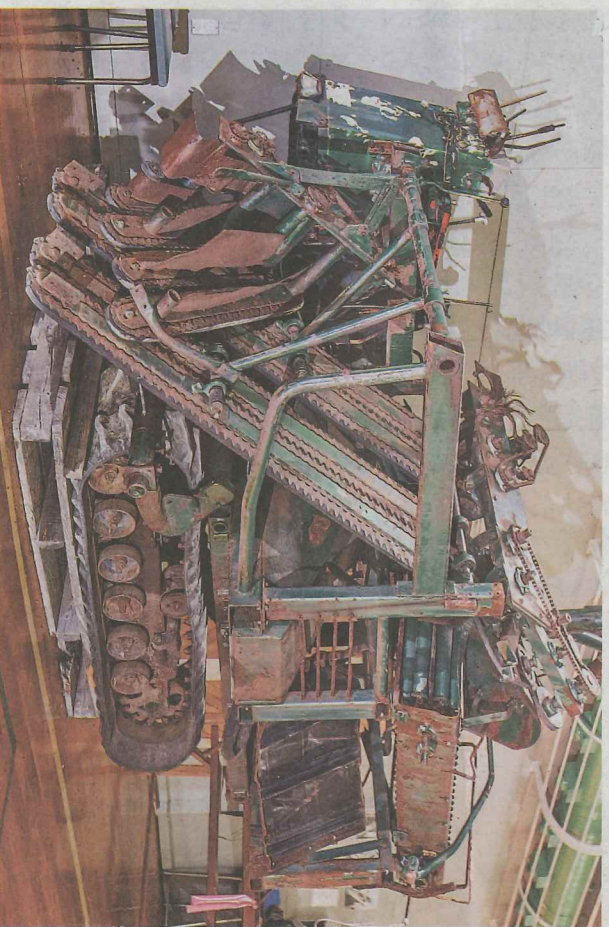
西2線

■ 次回は「春探湖のヒブナ」。釧路市立  
博物館学芸員の野本和宏さんと元学芸  
員の針生勤さんです。

オサタ農機の工場内で部品の改良に励む長田秀治さん。社長も普段は作業着姿。最近は何早く目が覚めちゃって就業前に試作スベースにできることが増えた。富良野市扇山



㊥2本のベルトではさんで畑のニンジンを引き抜く収穫機のフレーム部分㊦収穫したニンジンは根元から5ミ以内できれいに葉が切り落とされている。「この精度を高めるのが予想した以上に難しかった」と長田さん



開発の原点となったニンジン収穫用の試作機。廃校になった南富良野町内の母校・金山中の体育館を10年前から格納庫として借りている

## 訪ねる

### ■博物館「土の館」 土づくりの歴史伝える

真正面に十勝岳を望む上川管内上富良野町の丘陵地帯に、北海道遺産に選定されている土の博物館「土の館」がある。地元の老舗農機メーカー「スガノ農機」が1992年に本社わきに開設した私設博物館で、昨年、道内4件目の「機械遺産」にも認定された。

同社は大正6年(1917年)の創業。トラクターなどに装着して畑を耕す「プラウ(洋すき)」の製造・販売では国内のトップクラス

の実績を誇る。

上富良野町は十勝岳の噴火による泥流で大きな被害を受け、農家は毒性が強い土壌の改良に辛酸をなめた。スガノ農機の元社員で現在は「土の館」の館長を務める田村政行さん(63)は「上富良野の土は重粘土や火山灰で重く、おまけに傾斜地。プラウには条件が厳しいが、ここで通用すれば全国で通じる。条件が悪いからこそ、逆に良かった」と話す。

「土の館」では100点以上の貴重な土壤標本や新旧の農機具、各種プラウなどを展示。機械化初期の輸入物や国産1号機を含む約80台のトラクターも並び、土づくりの取り組みや泥流災害を乗り越えた地域の歩

「土の館」は上富良野町

